

朝鮮学会

第73回大会要項

オンライン開催

2022年10月1日(土)・2日(日)

2022年度 第73回朝鮮学会大会プログラム

1. 日 時：2022年10月1日(土)・2日(日)
2. 開催方法：オンライン開催[ZOOM(ズーム)使用]
3. 大会プログラム

第1日 10月1日(土)

- 1) 公開講演 13:00～16:30

I. 一九四六・八・一五、ピョンヤン 一解放一週年紀念詩集『巨流』と『北風』を中心に―

早稲田大学 名誉教授 布袋 敏博 氏

II. 済州方言の形態素分析の意義

韓国国立全北大学校 教授 高 東 昊 氏

- 2) 総 会

第2日 10月2日(日)

- 1) 研究発表会 10:00～

《(院)大学院生》

◆第1部門：語学分野

1. 10:00～10:30

日本語の敬語表現に対応する韓国語の表現

―日本語の小説の会話文とその韓国語訳を比較して―

西南学院大学 金 兌 妍

2. 10:40～11:10

韓国語における統語的接辞について

―接辞「-답-」「-갈-」「-이-」を中心に―

京都大学(院) 葉 晨 傑

3. 11:20～11:50

朝鮮語の固有語名詞における母音間のㄹ弱化の条件について

東京大学(院) 石 川 峻

<昼食 12:00～12:50>

4. 13:00～13:30

韓国語の時間副詞にみられる時点表示と認識的要素の関連について

京都大学(院) 川 畑 祐 貴

5. 13:40～14:10

パラレルコーパスを利用した述語反復構文の韓日対照研究

―「P 기는 P」構文と「P ことは P」構文を中心に―

京都大学(院) 徐 敏 徹

6. 14:20～14:50

韓国語 -eci- 受身構文の捉え方―行為者の意図した対象の変化―

東京大学(院) 鄭 宇 鎮

7. 15:00～15:30

韓国語「-을게」の意味機能と聞き手志向的態度

北海道大学(院) 高 先 慶

◆第2部門：文学分野

1. 10:00～10:30

「せめては一朵の花と」……詩集を持たない詩人金素雲
—「時代日報」に掲載された自作詩を中心に—

同志社大学(院) 中井 裕子

2. 10:40～11:10

金東里の初期作品における「朝鮮的なもの」の脱構築

慶應義塾大学 金 景 彩

◆第3部門：歴史学・考古学・文化人類学・その他の分野

1. 13:00～13:30

新羅神宮神主考

京都府立大学 井上 直樹

2. 13:40～14:10

朝鮮肅宗代の宮中儀礼にみる朝清関係

久留米大学 桑野 栄治

3. 14:20～14:50

植民地時代の朝鮮人産婆の労働環境と社会的位置

—1920年代、都市京城の産婆を中心に—

奈良文化財研究所 扠 素 妍

公開講演

一九四六・八・一五、ピョンヤン —解放一週年紀念詩集『巨流』と『北風』を中心に—

早稲田大学名誉教授 布袋敏博

1945年8月15日の「解放」を、ソ連軍も、金日成を前面に押し立てた満洲派も、ピョンヤンで迎えることは出来なかった。「解放」の歓喜を謳う資格を持たなかったのである。そうした行為を行ない得た在ピョンヤンの文学者たちは、1946年1月25日に『関西詩人集』（解放紀念特輯）（人民文化社発行）を刊行した。同書は長く「幻の書」であったが、近年韓国でその存在が明らかにされ、2012年に『近代書誌』第6号に影印掲載された。これによって身近に接することができるようになったが、この新発掘の意義は大きい。

一方、ソ連軍は、北朝鮮の南朝鮮に対する優位を、満洲派は、北朝鮮内部での他の各派に対する自派の優位を示さなければならなかった。その機会が1946年8月15日の「解放一周年」紀念の行事であった。その時一挙に刊行された一連の一周年紀念作品集である。次のとおりである。

[以下、1946年8月15日発行]

『金日成將軍讚揚特輯 우리의 太陽』（北朝鮮藝術總聯盟發行）

『八・一五解放一周年紀念戯曲集』（同上）

『八・一五解放一周年紀念小説集』（同上）[未見]

『八・一五解放一周年紀念評論集』（同上）

詩集『北風』（八・一五解放一周年紀念）（同上）

詩集『巨流』（八・一五解放一周年紀念）

（北朝鮮藝術總聯盟編輯、八・一五解放一週年紀念中央準備委員會 發行）

『永遠한 握手』（解放一周年紀念詩集）（朝蘇文化協會發行）[未見]

『同志에의 〇〇』（安龍灣詩集（解放一周年紀念出版））

（平北朝鮮芸術連盟發行）[未見]

ところで、この解放一周年紀念刊行物の中では、どうしても『金日成將軍讚揚特輯 우리의 太陽』が注目されがちである。さらにまた、全体の半数を占める詩集などについて、『われらの太陽』収録作品も含めて、詩史的な接近・分析になりがちである。

けれども、当時の状況を見ると、この一周年紀念作品集は、単発で取り上げるのではなく、すべてを一つの動きとしてとらえ、同年初めに刊行された『関西詩人集』も含め、論じる必要があると思われる。上に示したように、まだ見ることのできない作品集が3冊あるが、しかし『永遠한 握手』（解放一周年紀念詩集）と安龍灣詩集『同志에의 〇〇』は、他の文献からその内容を類推することができ、全体を見渡すことは可能である。

さらにまた、これまで触れられなかった詩集『北風』の存在も明らかになり、よりいっそう当時の様相を知ることができるようになっている。

現在、解放から1945年内の資料は、『労働新聞』の前身の『正路』を除いてはほとんど見ることは出来ない。年が明けると、「赤い軍隊」の新聞、『朝鮮新聞』が創刊されるが、これは当時の北朝鮮の文学界や文化・芸術界の内部情報を伝えて貴重である。

ここでは、これら数少ない解放直後の以北地域における新聞資料等も参照しながら、上記の各作品集を、個別に検討していく。その上で、詩集『北風』と詩集『巨流』を補助線として引くことで、一周年紀念作品集全体の意図が明らかになるのではないかと、そうした予測のもとに、概観することにする。

濟州方言の形態素分析の意義

韓国国立全北大学校教授 高 東 昊

本発表では、形態素の基本的な概念が濟州方言にいかに関適用されるか、そして、その意義は何であるかを考察せんとした。その結果、

(1) ‘숫디 [솔에], 조곶디 [곶에], 밭디 [밭에], 배곶디 [바깥에]’ をおのおの体言 ‘숫, 조곶, 밭, 배곶’ と場所の副詞格助詞 ‘에’ の形態的異形態 ‘디’ との結合として分析した。

(2) 濟州方言において、用言語幹末が子音群（例：훈-[굶-]）や濃音（例：뭉-[뭉-]）、有気音（例：갈-[갈-]）の場合、その後には ‘으’ と子音始まりの語尾が結合するが、この ‘으’ は語尾に属するものと見做した。その根拠は、派生語では、例えば、*‘마트기다’, *‘노프직하다’ ではなく、‘맬기다’, ‘눅직하다’ の如き形で実現するという点であった。

語尾形態素については、形態素の最小単位形式と機能を明らかにすることに注力した。転成語尾、連結語尾、終結語尾を対象とし、各語尾の異形態を明らかにした上で、その結合可能性を提示した。その結果、

- (1) 転成語尾については、形式は中部方言と異なるものがあったとしても、その用法はほぼ同一であるという点を明らかにした。
- (2) 一般に意味の違いなく使用されていると目される対等的連結語尾 ‘-고’ と ‘-곡’ は、不完了の先語末語尾 ‘-읻-’ との結合如何が各々異なるため、両者は互いに異なる形態素に属するものと見做した。
- (3) 濟州方言の先語末語尾と従属的連結語尾の結合様相については、次のように整理した。
 - 1つ目に、回想を表す ‘-아-’ と丁寧を表す ‘-읍니-’ は従属的連結語尾と結合しない。
 - 2つ目に、因果を表す連結語尾のうち、純粹に条件を表す ‘-(으)민’, ‘-건’ は、不完全相、完了相、推測/意図を表す先語末語尾と結合しうる。
 - 3つ目に、因果を表す連結語尾のうち、直接的な原因と結果を表す ‘-(으)난’ は、不完全相、完了相を表す先語末語尾と結合しうる。
 - 4つ目に、転換を表す連結語尾は、完了相を表す先語末語尾 ‘-앗-’ と結合しうる。
 - 5つ目に、相関をあらわす連結語尾は、時相を表す先語末語尾と結合しうる。
- (4) 終結語尾については、既存の研究で、それが異形態かどうかの判断をせず、形態素の数を非常に多く認めてきたが、他の終結語尾との系列的関係や、語幹、先語末語尾との統合的關係を考慮し、異形態の關係にある終結語尾を明らかにした。

形態素は、文法研究の最小単位である。本発表では、形態素分析の主要な原則である代置によって、濟州方言の特徴的な語尾形態素を概観した。また、用言の構造が「語幹+先語末語尾+語末語尾」であるならば、あらゆる語幹にあらゆる先語末語尾が結合し、その後あらゆる語末語尾が結合できなければならないだろう。しかしながら、韓国語の他の諸方言と同様に、先語末語尾が結合する語幹と語末語尾には一定の制約がある。本発表では、語末語尾を、転成語尾と連結語尾、終結語尾に分け、先語末語尾と語末語尾の結合様相を見た。しかし、本発表では、結合様相のみを提示したに過ぎず、結合が可能な理由や不可能な理由についての考察までは至らなかった。また、先語末語尾同士の結合様相についても扱うことができなかった。これについては、別の機会に譲る。

(辻野裕紀 訳)

1. 日本語の敬語表現に対応する韓国語の表現 —日本語の小説の会話文とその韓国語訳を比較して—

西南学院大学 金 兌 妍

日本語と韓国語の敬語体系と使用方法は、類似点もあるが相違点もある。日韓の敬語について、従来の研究は「同一場面」と「同一の相手」という条件のもとで談話全体における敬語使用率や使用状況の分析が行われてきた。本研究では「同一場面」と「同一の相手」に加え「同一内容」という条件における敬語表現について対照分析を行う。分析資料として2000年以降に出版された日本語の小説5冊とその韓国語訳5冊を選択し、小説内の会話文において日本語の「尊敬語」「謙讓語（謙讓語Iと謙讓語II）」「美化語」が韓国語でどのように訳されたかを調査した。

量的分析からは4点が明らかになった。①日本語の敬語は美化語、尊敬語、謙讓語の順に多く用いられ、韓国語では敬語の数が日本語の半分以下であった。②日本語の尊敬語は韓国語でも尊敬語として訳されることが多く、謙讓語はなかった。③日本語の謙讓語は韓国語では半数以上が非敬語で、敬語で訳された場合は尊敬語と謙讓語は同程度の割合であった。④日本語の美化語は韓国語では半数以上が非敬語で、敬語で訳された場合はその多くが尊敬語に訳された。

質的分析からは7点が明らかになった。①日本語では目上の人が目下の人に対して「尊敬語＋普通体の文末」を用いるが、それは韓国語では「非敬語＋丁寧体の文末」に訳された。②日本語の「-ていただく」は韓国語では「-くださる」か、授受表現を用いない尊敬表現に訳された。③日本語の「-ていただく」は恩恵がないときにも使われるが、韓国語では恩恵がない場合には授受表現は用いられなかった。④日本語の謙讓語は、韓国語で対応する謙讓語がない場合には表現を変えた謙讓表現か、「-어/아 드리다 (-て差し上げる)」で訳された。⑤日本語の「します」の意味で用いる「させていただきます」は、韓国語では敬語ではない「-겠습니다 (-します)」と訳される傾向がある。⑥日本語の美化語が韓国語で謙讓語によって表現される場合、物に加えて感謝や心配などの感情表現でも用いられ、聞き手に対して丁寧な態度を表す「-을/를 드리다 (-を差し上げる)」が用いられた。⑦日本語の美化語の多くは韓国語では訳されなかった。

以上の結果に基づき、発表ではこのような結果が生じた原因についても考察する。

2. 韓国語における統語的接辞について —接辞「-답-」「-같-」「-이-」を中心に—

京都大学(院) 葉 晨 傑

韓国語では形態操作に統語的な要素が入る現象がよく見られる。(1)では複数を表す接辞「-들」が、等位接続構造となっている「책」「연필」「지우개」の三つの名詞を語幹にし、その後ろに付いている。(2)では「정치인」という名詞が「우리가 믿는」の修飾を受けて一つの名詞句になってから、接辞「-답-」「-같-」「-이-」と結合し形容詞的な要素として用いられている。

(1) 책, 연필, 지우개들

[[책, 연필, 지우개]들] (本、鉛筆、消しゴムなど)

(2) 우리가 믿는 정치인답다 / 정치인같다 / 정치인이다.

[[[[[우리가][[믿는]]정치인]답/같/이]다]

(私たちが信じる政治家らしい / に似ている / だ)

(1)(2)のように接辞添加のプロセスに統語的な構造が含まれる例は他にもあるが、語の内部に句が侵入することは原則として認められないという「句排除の制約」が存在する。この現象を説明するために、一部の研究者は統語的接辞(syntactic suffix; 句などの統語的な単位に接続する接辞)という概念を提案している。しかし、基本的な文法の枠組みを壊すことが望ましくないなどを理由として統語的接辞を批判する研究も少なくなく、(1)(2)のような現象を依存名詞や依存形容詞、助詞など他の用語を用いて説明している研究者もいる。

そこで、本発表では典型的な統語的接辞とされた「-답-」「-같-」「-이-」に関する分析を通じて、統語的接辞が韓国語や他の言語の記述に必要であることを論じ、この用語の妥当性を提示する。分析の結果、接辞「-답-」「-같-」「-이-」は統語的接辞の特徴に当てはまり、統語的接辞として設定すべきである。「-답-」「-같-」に関して、一部の先行研究は依存名詞を真似して「依存形容詞」という概念を作り、これらの接辞が句に接続することを解釈しようとした。しかし、依存名詞は前の成分との間に連体形語尾や属格助詞など統語的な連結装置が必要である。一方、「-답-」「-같-」などのいわゆる依存形容詞は、前の名詞句との間に統語的な連結装置の介在なしでそのまま結合するため、依存名詞とは異なる性質を示し、依存形容詞で説明するのは無理がある。「-답-」「-같-」を名詞句に直接付くことができる接辞として説明する方が妥当である。

「-이-」に関して、一部の先行研究は「-이-」が助詞や動詞語幹であると解釈した。助詞説に関して、用言に付く接辞が「-이-」の後ろに後続しうるが、助詞にはこのような接続ができないため、「-이-」を助詞と説明するのは適切でないとと言える。動詞語幹説に関して、「-이-」が前に来る名詞句に格を付与できないことや、「-다」など文を完結させる語尾が付いても「-이-」が単独で出現できないことなどにおいて普通の動詞語幹と異なるため、「-이-」の特徴を完全に説明することはできない。一方、接辞は前の名詞句と結合し用言語幹を作るため、後ろに用言に付く接辞が接続でき、また、接辞には自立性も格付与の機能もないため、「-이-」を接辞として説明すべきである。

3. 朝鮮語の固有語名詞における母音間の ㄷ弱化の条件について

東京大学(院) 石川 峻

現代朝鮮語には語幹が変則的な交替を起こす「変則用言」と呼ばれるものがあり、具体的にはㄴ変則、ㄹ変則に加えてㄷ変則用言がある。子音弱化を通して「変則化」と見られるこれら変則用言には幾つかの類型が存在するが、これと並行して固有語名詞においても類似する弱化現象を経たと考えられるものがいくつかある。本稿はこれらの名詞に関して、その弱化が前後母音のアクセントと最少母音であるか否かを条件としていた可能性を指摘する。

例えば「覓」に当たる語は韓国の標準語で미름であるが、この語のㄷに当たる部分にㄷをもつ語形が全羅、黄海、咸鏡、平安の各道に見られる。弱化を起こしたと考えられるこれらの語は訓民正音創制当時の資料においてすでに現代語と酷似した様相を示し、故にその歴史が極めて長いと考えられる。

この差異は過去のある時点においては共時的にこれらを分別する何らかの分節音あるいは超分節音的差異が存在したために生じたと考えられるが、このような弱化にはアクセントと最少母音であるか否かが条件となっているようであり、ㄷ変則用言とその周辺の用言活用類型のパラダイムを考慮すると、平声の非最少母音と去声の最少母音の間、並びに平声の最少母音二つの間において起こったと考えられる。

本研究ではこのようなㄷ不規則用言の再構に関連して、その傍証となりうるいくつかの固有語名詞における類似の弱化現象とその条件について考察する。固有語名詞に於けるㄷ弱化現象は用言のそれと比べても、ㄴやㄹの弱化現象と関連する名詞と比べてもその数がかなり少ないと考えられるが、既存の研究においてはこれら少数の例に焦点を当てたものは少なく、特にアクセントを含めて考察しているものは管見の限りでは非常に限られている。本研究ではこのようなㄷ弱化を経たと考えられる固有語名詞においても、上述したㄷ不規則用言と同じ音韻環境を弱化の条件としてもった可能性を指摘する。

4. 韓国語の時間副詞にみられる時点表示と 認識的要素の関連について

京都大学(院) 川畑 祐貴

「基準時点に対して事態が具体的にどの時点に位置するのか」を表す概念および現象は「時間的距離 temporal distance」、「遠隔性の度合い degrees of remoteness」ないしは「遠隔性の区別 remoteness distinctions」とも呼ばれるが (cf. Dahl 1984, 1985; Comrie 1985; Botne 2012)、韓国語において、具体的な時点位置は「-았/었-」や「-ㄴ/는-」などの文法形式のみでは十分に表示されず、時間名詞や時間副詞といった語彙的手段などを用いる必要がある。そうした語彙的表示手段は、時間副詞の分類研究や時間語彙の使い分けに関する研究などで扱われるが、課題として、①時間軸を文法形式の意味に基づき「過去/現在/未来」「過去/非過去」のように区分する場合が専らで、区分内あるいは区分間の時間的程度性(「具体的にどの程度、過去/未来なのか」)について十分に考察されているとはいいがたい点(민현식 (1990, 1998 など) は「直前過去」「直後未来」という区分に言及)、②(「時間的距離」などの通言語的研究にも言えることだが)「具体的な時点位置の表示」と「時点位置に対する遠近性認識の表示」が概念的に混同しやすい点などが挙げられる。

以上を踏まえ、本発表では、具体的な時点位置の表示における認識的要素の関わりに注目し、時間副詞での時点位置の捉え方や遠近性認識の現れについて考える。

考察の結果として、具体的な時点位置の表示形式を「具体的な時点位置を把握するための根拠の質」と「時点位置に対する遠近性認識の表示」という観点からまとめてみたものが以下の(1)と(2)である。

(1) 一定の基準・指標に基づく客観的な表示

(例：2022 년 10 월 2 일 , 오후 3 시 , 10 분 후에 , 월요일에 , 오늘など)

(2) 事態に対する判断・評価に基づく主観的認識的な表示

- a. 時間的遠近性を明示する (例：막 , গত , 곧 , 바로など)
- b. 時間的遠近性を含意しうる (例：아까 , 지금 , 방금など)

(1)と(2)は「事態の時間的位置付けに対する認識的要素の関わり」の点で異なる。(1)は一定の基準や指標に基づく時間単位などの使用を通じた客観的表示パターンで、(2)は一定の時間領域と事態との認識的な包含関係の中で時点位置表示がなされるパターンである。

(2)はさらに、時間的遠近性の認識をとりたてて示す(2a)とそうでない(2b)に区別されうる。(2a)は事態が相対的な「近接/遠隔領域」に含まれると判断可能か否かにより時点位置を評価するため、遠近性の認識は本質的である。このパターンは空間語彙や程度表現、強調表現などとの意味的形態的関連が見られる。一方(2b)は時間領域「今」と事態との包含関係を判断・評価し、(直示的に)表示するが(川畑 2021)、遠近性のニュアンスは時点位置の判断・評価過程や形式間の相対的時間関係などから含意として生じうる。(1)はそれ自体で遠近性を表さないが、談話上の文脈や言語外情報から語用論的に、または(2)の形式との共起を通じて時点位置に対する遠近性認識が感じられうる。

5. パラレルコーパスを利用した述語反復構文の 韓日対照研究 — 「P 기는 P」構文と「P ことは P」構文を中心に—

京都大学(院) 徐 敏 徹

本発表は「먹기는 먹는다」や「食べることは食べる」のように、先行述語と後行述語に同じ述語(Predicate),あるいは、後行述語においては代用述語が使われる述語反復構文「P 기는 P」と「P ことは P」の対照研究である。先述した構文の研究は個別言語の分析が中心となっており、対照研究はあまりなされていない。しかし、韓日両言語の間に見られる類似性を考えると、韓日それぞれの述語反復構文に関する先行研究の記述にも類似性が見られる可能性がある。本発表では、①韓日の先行研究における両構文の記述を比べて類似点・相違点を発見し、②パラレルコーパスを利用して両構文とそれらの訳にどのような特徴が見られるのかを検討する。

まず、韓日それぞれの先行研究を比較した結果、「Pであることを認める」という構文の意味的な特徴や「構文の中に副詞的な要素を挿入できる」という形態的な特徴の記述が類似していることがわかった。一方、日本語の構文に関する記述が韓国語の構文にも当てはまるような記述（構文の時制の解釈は後行述語が基準となる）や、韓日のどちらか一方の構文にしか当てはまらない記述（日本語の構文の語順は固定されている）もあるので、今後、両構文の記述をより充実したものにする必要がある。

次に、韓日の作品40本ずつ（複数話からなるドラマ30本と映画10本）を対象として字幕を収集し、二つのパラレルコーパス（韓日・日韓）を構築した。上述した構文を抽出・分析した結果、「P 기는 P」のような完全反復構文は113例、「P 기는 하-」のような部分反復構文は844例で合計957例が得られた。一方、「P {こと／の／の} は P」構文は3件のみが得られた。さらに、韓国語の反復構文の日本語訳を分析した結果では「P ことは P」を使用した訳が皆無であることがわかった。最も多く使われた翻訳方法は「食べるけど」のように、一部を省略する方法であった。その他の翻訳方法としては「意識」「述語反復構文を完全に省略」「副詞的な表現の使用」の順に並ぶ。

上述した結果になった理由として、「P 기는 P」に対応する日本語の構文が「P ことは P」以外にも「P には P」や「P といえば P」のような完全反復構文、「{ADJ く／ P で} はある」のような部分反復構文など、複数存在している点が挙げられる。反対に「P ことは P」は、「P 기는 P」と「P 기는 하-」以外の他の韓国語の反復構文には対応しにくいと考えられる。以上の点を踏まえると、「P 기는 P」と「P ことは P」は、一見、一対一で完全に対応しているように見えるが、「P 기는 P」の方がより多義的な構文であると言える。パラレルコーパスにおける両構文の生産性の違いは、この点を裏付けていると考えられる。

6. 韓国語 -eci- 受身構文の捉え方 — 行為者の意図した対象の変化 —

東京大学(院) 鄭 宇 鎮

本発表では、-eci- 構文の表す事象の因果連鎖に注目し、-eci- 構文の受身用法(以下、-eci- 受身構文)の詳細な意味記述を行う。

- (1) 그 김치 향아리는 땅 깊숙히 묻어졌다.
- (2) a. 이 그림은 [그 유명한 화가 피카소 /?영이]에 의해 그려졌다.
b. 그의 오해가 철수에 의해 풀어졌다.
- (3) a. 개는 남편에게 철저히 길들여졌더군.
b. 인호는 그 놈들한테 입이 /*입을 벌려졌다.

-eci- 受身構文は、非情物主語を典型とし、ey uyhay で標示される不特定行為者が文に現れないという特徴を持つとされる(1)。特定の行為者が文に現れる場合は、有名な画家の場合は自然に容認されるが、そのような人物でない場合には容認されない(2)a。この事実について、鄭聖汝(1999: 201)では、「事態を直接コントロールして引き起こしうる能力をもつ(履歴を背景に持ち認知的に際立つ)人物として、話し手は認知しやすい」と説明されている。(2)aの容認可能性は行為者の特徴によって決まると考えるのである。しかしながら、-eci- 受身構文には、(2)bのように行為者が特に履歴を背景に持っていないように思われる場合でも容認されることがある。本発表では、(2)aと(2)bに見られる事実を適切に捉えるためには、行為者の特徴ではなく、主語の指示対象に生じた変化に注目する必要があると考える(cf. 西村・長谷川2016: 298f. など)。(2)aと(2)bは、特定の行為者が意図した行為によって対象に生じた属性の変化(正確には、対象が当の属性を伴って出来ることになるという変化)を表すと考えるのである。(2)aに見られる容認可能な行為者の違いは、対象の属性の変化を引き起こす行為者であるか否かを反映したものと見える。このように考えると、有情者主語で行為者名詞句が与格で標示されることで従来 -eci- 受身構文の対象外とされてきた場合(3)aだけでなく、所有者や身体部位がともに主格で標示され、行為者の身体部位への働きかけが、所有者への働きかけでもある事象を表す(3)bも、行為者の意図した行為によって対象に生じた変化を表す(1)・(2)と意味的に深いつながりがあることがわかる。身体部位が対格で標示されると不適格になることから、介在使役構文に由来する -i- 系受身構文の〈ガ/ヲ型〉と異なり、〈ガ/ガ型〉と同様に二重対格構文をもとにした受身文である可能性が示唆される。

参考文献

鄭聖汝(1999)『他動性とヴォイス(態) —意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究—』神戸大学博士学位論文。

西村義樹・長谷川明香(2016)「語彙、文法、好まれる言い回し —認知文法の視点—」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』東京：開拓社。282-307。

7. 韓国語「-을게」の意味機能と聞き手志向的態度

北海道大学(院) 高 先 慶

本稿では、韓国語の終結接辞の「-을게」は、約束のモダリティと、＜聞き手志向性＞という聞き手に対する話し手の心的態度が両立する形式であることと、「-lkey」の意味機能が多岐に渡る際の文脈的特徴について明らかにすることを目的とする。

韓国語において話し手の行為意志を表す終結接辞には、以下の(1)のように「-을래」と「-을게」がある。

- (1) a. 내일 또 올래.
b. 내일 또 올게.

「-을래」と「-을게」は、両者とも迂言的な形態から文法化を経て話し手の行為意志を表す固有の意味領域を獲得した形式である(박재연 2004 参照)。しかし、二つの形式には機能上の相違がある。希望を表す(1)「-을래」とは違い、約束を表す(2)「-을게」には聞き手志向性が含まれている。Searle (1969)でも記述された通り、＜約束＞は、聞き手が望ましいと思う行為を話し手が自ら義務付けて実行する発話行為である。つまり、＜約束＞で最も重要な発話の特徴は聞き手の望ましさを把握による意向の一致、聞き手志向的態度であるといえる。「-을게」は約束のモダリティ形式であるため、意向の一致という意味素性を基本として持っており、他の意味機能として働く際にもこの素性が表される。次の(2)は、「-을게」の意味機能が多岐にわたる例である。

- (2) a. (自分の代わりに注文しにいく友達に) 나는 커피로 할게.
b. (友達と旅に行った際、先に部屋に入りながら) 먼저 잘게.
c. (荷物を運んでもらいたい際に) 냉장고부터 옮길게요.

「-을게」は文脈により(2a)＜決定の伝達＞、(2b)＜宣言＞、(2c)＜行為指示¹＞に分岐する(高2021)。文脈的特徴をみていくと、(2a)は両者が関わっている行為について意向を問う質問の返事として、(2b)は話し手の行為実行によって影響を受けうる聞き手が想定されている状況で、(2c)は、両者が関わっている行為に対して状況をコントロールできる人が使用する。この際に、これらの文では、＜受容＞や＜同意求め＞のような＜聞き手志向性＞が浮き彫りになる。これは、意向の一致から生み出された2次の発話効果であるとみられる。

以上の分析から、韓国語の終結接辞の「-을게」は、＜約束＞、＜決定の伝達＞、＜宣言＞、＜行為指示＞の意味機能と、＜受容＞、＜同意求め＞のような聞き手志向的態度が両立していることがわかった。なお、「-을게」が＜約束＞以外の他の意味機能へ分岐する際には特定の文脈が必要であることもわかった。

参考文献

高・先慶(2021)「韓国語の「-silkeyyo」の意味機能について」『研究論集』20. 北海道大学大学院文学院. pp167～183.

Searle, J.R. (1969) *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. London: Cambridge University Press.

박재연(2004)『한국어 양태 어미 연구』서울대 박사논문.

1 さらに、一つの述部で共起できない尊敬の「-si-」とも結びき、「-silkeyyo」という形態として行為指示を表す場合もある。

1. 「せめては一朶の花と」……詩集を持たない詩人金素雲 —「時代日報」に掲載された自作詩を中心に—

同志社大学(院) 中井裕子

はじめに

本発表では、金素雲の46作(2022年7月現在の調査数)の自作詩を紹介し、彼の民謡、童謡、近代詩の日本語訳の基盤となった詩人的資質を考察する。金素雲は12歳で密航して以来、日本と朝鮮を往還しながら日本語とハングルの表現と格闘し、処女詩集出版を企図した。しかしそれらは資金面で挫折した。素雲にとって詩作し詩を投稿する行為とは何だったか。先行研究には、林容澤『金素雲『朝鮮詩集』の世界 祖国喪失者の詩心』(中公新書2000年)があり、数作の自作詩が紹介されているが、全体像はまだ見えていない。筆者は崔南善主宰「時代日報」投稿詩に補助線を置いて、素雲の若い詩心に迫る。

1. 二冊の処女詩集

金素雲研究家村上美佐子の年譜¹によると、金素雲の詩作は、1925年(16歳)「詩帖『出帆』を釜山草梁慶南印刷会社から趙明熙序詩、安夕影装幀、羅蕙錫扉絵で五百部印刷したが、印刷費未払で、わずか十余部を手にすることができただけで流産」とあるのが最初である。

一方、アンソロジー訳詩集『乳色の雲』(1940.5)の「Rへーあとがきに代えて」では、「震災の一二ヶ月前、そのころ大阪の住吉にゐられた百田宗氏²から詩集の序文をいたゞいたことがある。よくも臆面もないことが頼めたものだと思ふが、その詩集といふのはいい工合に校正が出たゞけで本にはならず済んだ。自費出版で、印刷所にあとの費用が拂へなかつたか何か、そんなことだらうと思ふ。」とある。「震災の一二ヶ月前」とあるので、『出帆』よりも早く1923年7・8月ごろ、百田も読める日本語で詩を書き出版を企図していたことになる。

2. 「時代日報」掲載詩の分析

別に、「時代日報」の文芸欄への投稿もある。素雲は1925年11月1日に「개암이」「문을두드림」を投稿し、翌1926年5月の「그대들은이렇게 살라」まで計20作を投稿した。このうち4作の題名には、「旧稿より」「習作旧稿」とある。筆者は、これらの詩が百田序文詩集や『出帆』に収録された詩ではないかと仮定し、20作と筆者による試訳を紹介しつつ、当時の金素雲の振幅の激しい心情と資質を探る。

3. その後の詩作から『乳色の雲』『朝鮮詩集(上・中)』の翻訳へ

その後、素雲は雑誌『新民』『朝鮮之光』『文章』『朝鮮文学』『中央』や各種新聞などに、童謡、親日詩も含め26編を投稿したが、徐々に翻訳に重点を置き始めた。しかし、『乳色の雲』や『朝鮮詩集(前期・中期)』(1943. 8・10)の翻訳手法や選詩には、金素雲の青少年期からの日朝両語や両詩人たちとの交流から得た独自の詩心の深まりが垣間見られると筆者は考えている。

1 東大比較文学會『比較文学研究』79号(2002.2)および93号(2009・6)

2 正しくは百田宗治(1893—1955)大正・昭和期の詩人、児童文学者、作詞家。

2. 金東里の初期作品における「朝鮮的なもの」の脱構築

慶應義塾大学 金 景 彩

本発表は、文学者・金東里の植民地期に発表した作品を「朝鮮的なもの」の脱構築を試みた実践として読み直すことを目的とする。

1934年に登壇した金東里は、「岩」(1936)、「巫女図」(1936)、「黄土記」(1939)など、土俗的で神話的な要素を取り入れた作品を発表したことで知られる。1930年代後半には、いわゆる「世代論」に新進作家として関わり、先行世代と金東里自身が属する「新世代」との思想的な差異づけを企てた。

金東里が文壇に登場した1930年代半ばは、来るべき戦争の合理的遂行のために、植民地／帝国の関係がより暴力的な形に再編されつつあった時期である。皇民化政策による朝鮮の「地方化」が進む中、知識人らは「日本」という圧倒的で動かし難い「事実」をいかに処理するかという問題に直面した。金東里の一連の作品・批評はそのような「事実」との距離によって、その位相と意義が測られてきたと言える。とりわけ、彼の作品に表れる土俗的なイメージや人間の在り方は、「朝鮮的なもの」を保持しようとした実践として、さらには「朝鮮的なもの」に宿るヒューマニズムを「西洋」に対抗する反近代的な「東洋」の中心に据えることで、帝國的な普遍性(大東亜)に対して一定の抵抗性を確保していたものとして読解されてきた経緯がある。しかし、すでに植民地末期の思想状況をめぐる一連の先行研究が明らかにしてきたように、「朝鮮的なもの」を堅持することは、「大東亜」に象徴される地域構想と全く矛盾せず、むしろ帝國的な主体形成に合致するものであった。結果として、所与の「朝鮮的なもの」を前提とする読解は、金東里の作品世界に潜められた抵抗性の矮小化を招くことになるのである。

本発表は、先行研究が感知した金東里作品の抵抗性が、むしろ「朝鮮的なもの」を成立させない——特定の主体に還元されない——構造に由来すると考える。とりわけ、彼の初期作に表れる共同体の起源としての神話(土俗信仰)とそれが作品の中で果たす役割からそのような抵抗性が読み取れるという前提のもと、作品の分析を行う。金東里の作品を「朝鮮的なもの」の脱構築を試みたものとして読解することは、いわゆる「純粋文学」としての彼の作品と、彼自身が自らを「新世代」と命名しながら他者化した先行世代のプロ文学、さらに新体制成立後の国民文学を「植民地文学」が共有するアポリアの観点(すなわち、主体形成の不可能性)から連続的に捉えるための糸口になる。

1. 新羅神宮神主考

京都府立大学 井上直樹

朝鮮時代に編纂された歴史地理書である『新增東国輿地勝覧』慶州・古跡条には、慶州府の南七里にある「楊山蘿井」を新羅の始祖・赫居世生誕の地として伝えているが、2002～2005年の発掘調査によって、ここからは統一新羅時代の八角形建物址などが検出されるとともに、雁鴨池や月城など、王室関連遺跡から出土した「儀鳳四(679)年」銘瓦も発見され、それらは国家的祭祀と関連するものとして注目されている。

一方、『三国史記』新羅本紀には、新羅が「始祖初生の処」に神宮を創置したと伝えており、ここから神宮では始祖・赫居世が奉祀された、という見解が提示されている。しかし、『三国史記』には金氏・智証王代に始祖廟とは別に、新たに神宮が創置されたとも伝えており、始祖廟と神宮の神主が相違していた可能性も十分にあり得、こうしたこともあって神宮祭祀の神主をめぐることは、これまでさまざまな見解が提示されており、いまだ必ずしも統一見解に達していないというのが現状である。

新羅の神宮祭祀は新羅王親祀の一つとして『三国史記』に頻出しており、きわめて重要な儀礼の一つであった。それだけに神宮神主の解明は新羅祭祀理解においてもきわめて重要である。そこで本論では、既存の研究を批判的に検証しつつ、改めて神宮の神主を考究し、新羅祭祀史、さらには新羅の史的展開過程を解明する端緒にしたいとおもう。

2. 朝鮮肅宗代の宮中儀礼にみる朝清関係

久留米大学 桑野栄治

朝清間の相互認識を論じた崔韶子は、大清国が中原支配を完成させる康熙帝の治世年間になると、辺市・犯越・疆界問題などがかえつつも、「朝鮮はすでに確保された、そして安定した忠実な朝貢国家として認識するようになった」と結論づけた（崔韶子『清と朝鮮』慧眼、2005年）。とはいえ、康熙年間には朝鮮では顯宗から肅宗そして景宗の治世年間にまたがる長期政権であり、朝鮮が「忠実な朝貢国家」と認識していたかどうかは多面的に検証する必要がある。

たとえば、肅宗代の王妃冊封をめぐるのは礼部と朝鮮出身の通官（朝鮮語通事）が関与して中間操作と「賄賂外交」が繰り返され、北京と漢城では争論も発生していた。とりわけ、肅宗8年（1682）に継妃閔氏（仁顯王后）を冊封するにあたり、内閣学士アランタイがモンゴル王妃を冊封する際の儀註を持参して入京すると、迎接都監は『大明会典』のほか『大明集礼』を根拠に儀礼の手順をめぐる清使と論議を展開した。また、肅宗22年に庶長子昀（のちの景宗）を王世子として冊封するよう要請した際に、清の「通行の法」たる『大明会典』に「王と正妃と年五十を待ちて嫡無くんば、始めて庶長子を立てて王世子と為す」とあることから、礼部尚書フォロンはこの「親王嫡長子」の規定を法的根拠として反対した。翌年、肅宗が奏請使を再度派遣すると礼部尚書はやはり『大明会典』を楯にして異を唱えたが、文華殿大学士イサンガの意向が働き、康熙帝は肅宗の長病みに配慮して王世子冊封を承認した。おりしも康熙帝の第三次親征によりガルダン率いるジュンガル政権が敗北していたことも奏功したと考えられる。

このように、「冊封朝貢関係」にある朝清間の相互認識は肅宗代には乖離していたといわざるをえない。明清交替により朝鮮の宮中儀礼もまた変容を余儀なくされた。朝鮮の礼と法によれば、『国朝五礼儀』は望闕礼の儀註を嘉礼の筆頭に収録し、『経国大典』礼典には「正・至・聖節・千秋節に殿下は王世子以下を率いて望闕礼を行う」と明記する。この宮中儀礼の原型は、洪武2年（1369）に周辺諸国とのあいだに礼的秩序を構築すべく謁見儀礼として定められた「蕃王朝貢の礼」のひとつであり、『大明集礼』賓礼は「蕃国、正旦・冬至・聖寿に衆官を率い闕を望みて行礼するの儀註」を収録する。実際に元明交替期の恭愍王21年（1372）冬至以来、「蕃国」朝鮮の歴代国王も名節のたびに景福宮の勤政殿にて大明皇帝に忠誠を誓うとともに、文武百官に王権を可視化する舞台装置として望闕礼を実施していた。しかしながら、明清交替後に仁祖・孝宗そして顯宗が王宮の正殿にて大清皇帝のために望闕礼を挙行した事例はいまのところ確認できない。

そこで本報告では17世紀朝鮮の対清観を探るべく、肅宗代における清使入京時の望闕礼の実施形態を三類型化し、文武百官による習儀（リハーサル）の実態についても明らかにしてみたい。

3. 植民地時代の朝鮮人産婆の労働環境と社会的地位 —1920年代、都市京城の産婆を中心に—

奈良文化財研究所 扠 素 妍

産婆とは出産を助ける女性、主に老婆を意味するが、近代の衛生政策においては、専門的な医療訓練と開業資格の取得が必要な専門職として位置づけられた。産婆は、人を産む、また、人が生まれるという人間社会の基礎になる場面に関係する、衛生政策の末端エージェントである。そのため、産婆を研究することは近代化・文明化の道程を明らかにすることであり、また、その近代化の過程における女性の就業問題や出産衛生の改善、国家権力による女性身体への介入の実態を究明することにも繋がる。そして、植民地朝鮮の産婆を研究することは、植民地で施行された出産衛生政策の特徴、その政策下で働いた産婆の労働や生活の実態を究明し、植民地史における女性の生き方を解き明かすことになる。

植民地朝鮮における産婆については、이꽃씨などによって、産婆政策などに対する概括的な研究はなされている。しかし、植民地朝鮮の産婆に関する研究はまだその蓄積が少ない。その上、女性労働者としての産婆については、単に同時期の看護婦との比較により「社会的尊敬の面でも経済的側面でも当代の朝鮮女性が持つ最高の職業の一つ」と評価されるのみであった。また、慎蒼健の研究によって、産婆利用が1930年代まで朝鮮の地方社会には普及されていなかったことは確認できたが、都市部ではどのような状態であったのかは解明できていない。

以上の評価を検証し、産婆労働の実態を追究するため、本研究では、主に1920年代の新聞記事を通じて、京城という朝鮮社会の都市部における産婆認識と産婆らの職業婦人としての労働状態を分析する。その上、産婆のインタビュー記事や投稿記事を通じて植民地朝鮮の「出産の場」の様子を再構成しようとする。そして、以上を踏まえて植民地朝鮮における女性職業の中で産婆を位置付けることを課題とする。

その結果、次のことが明らかになった。1920年代には、植民地朝鮮の社会において女性解放論、女性職業などに関する議論が活発になるにつれて、都市部の女性労働者が「職業婦人」として新聞記事を通じて可視化する。その中で京城の産婆は、女性職業の中で、かなり高収入の職業として認識されていた。また、個人で開業するのが容易であったため、女性一人で自立できる良い仕事として認められていた。

一方、産婆自らの語りを確認することで、彼らは自分の職業を女性としては稼ぎがいい方であると認知していたが、収入は不安定であって、朝鮮社会の理解が不十分であることに強く不満をいだき、批判していたことを確認した。さらに、京城の産婆らは朝鮮社会では産婆に対する理解が不足だと述べていたが、このことから産婆利用という衛生思想が朝鮮社会では都市部にも普及していなかったことが窺える。